

特集「観光情報学」にあたって

川村 秀憲

(北海道大学大学院情報科学研究科)

大藪 多可志

(国際ビジネス学院)

松原 仁

(公立はこだて未来大学)

以前に本誌で観光情報学の特集を行ったのは2011年5月号(Vol. 26, No. 3)の「観光と知能情報」である。あれから5年が経過し、ここに再び、観光情報学の特集を行うこととなった。

振り返ってみると、2011年は忘れられないあの東日本大震災の年である。特集の直後は日本全国が復興へ向けて必死になっており、観光のことを考えるという雰囲気では全くなかった。原子力発電所の問題もあり、年間の訪日外国人観光客は前年からおよそ30%減の622万人、日本の観光業界は大打撃を受けた年だった。この先の日本はどうなっていくのかと誰もが不安をもちながら、復興へ向けて日々一歩ずつ歩みを進めるしかなかった年である。

そして現在、熊本地震や台風被害の傷はまだ癒えてはいないものの、昨年には年間の訪日外国人観光客がほぼ2000万人に達し、また2020年に東京オリンピックの開催を控えた明るいムードの中で今回の特集を迎えることができた。観光というのは、日々の安心安全な生活が確保されて初めて成り立つものである。観光は、人々に新しい経験や出会い、楽しみをもたらす。なくてはならないもの、とまでは言わないが、人生を豊かにさせる有意義なものである。そのような分野で特集を組めることを光榮に思う。

さて、ディープラーニングに始まった現在の人工知能ブーム。これまで不可能と思われてきた多くのことが実現可能になりそうである。産業、医療、交通など、さまざまな応用がなされ始めているが、そこにぜひ観光分野への応用も加えたい。観光はさまざまな産業の複合体であり、人々の非日常的な体験をプロデュースするものである。人工知能の応用問題としてもたくさんの要素を含んでおり、研究による波及効果も大きな分野である。

今回の特集では、これまで観光情報学会で行われてきた研究活動の中から本誌の読者に興味をもっていただけそうな話題をピックアップし、執筆を依頼した。「人工知能と観光」、これからの未来をつくっていく研究分野として素晴らしい組合せだと思うので、ぜひ多くの人工知能の研究者にも観光情報の分野に参入していただきたい。そして、東京オリンピックへ向けて観光の振興に力を貸していただきたく思う。

今回の特集では、はじめに松原より観光情報学という分野の総括と観光業界全体が考えていくべき共通問題に

ついて「観光情報学の体系と共通問題の提案」というタイトルで考えを述べた。観光情報学は新しい研究分野であり、事例研究が中心でまだまだ体系化がなされていない。研究から社会応用を見越して、研究領域を俯瞰することを試みた。

奥野氏には「観光情報 LOD」と題して、観光情報のオープンデータ化の取組みと応用事例について解説していただいた。いろいろな自治体の事例を含めて国内のオープンデータの現状、およびその応用例が興味深い。

橋田氏には「観光データと観光サービス」と題して、観光に関わるパーソナルデータの管理、オントロジーの構築、そしてそれらが生み出すことができる観光サービスの未来について解説いただいた。未来の観光情報サービスを想像すると、パーソナルデータの安全な利用とテラーメイドなサービスの実現は必須である。それを実現するために必要な研究テーマを示唆する興味深い解説である。

倉田氏には「観光客向け「ご当地アプリ」の現況」と題して、観光を楽しむスマートフォンアプリの現状をサーベイしていただいた。IngressやPokemon GOなどが観光に関連するアプリとして注目を集めているが、日本全国には観光客を楽しませようと市町村を対象としたたくさんのご当地アプリがある。人工知能を観光情報に応用することを考えると、一番身近なインタフェースはやはりスマートフォンアプリになる。今後の研究開発の参考となる興味深いサーベイとなった。

川村らは「イベント情報サービスの構築と運営、そして研究」というタイトルで、これまで取り組んできたイベント情報サービスの開発、運用について解説を試みた。研究者は新しい技術の開発、その有効性の検証には長けているが、実際に社会の課題を解決したり、人々にその技術を便利に使ってもらえるところまでを実現したりすることは容易ではない。ここでは、研究開発から社会実装、サービスの運用までを手がけた経緯と経験について述べることで、観光情報を研究する際の一つのヒントを提示できればと思う。

野津氏には「ビッグデータによる観光動態分析」と題して、株式会社ナビタイムジャパンが運用するサービスから得られたプローブデータ、GPSデータ、経路検索データなどを利用した訪日外国人の観光動態を分析した結果について報告していただいた。多数のユーザのデー

タを分析し、付加価値の高い情報を取り出すといったことはまさに人工知能の応用研究として研究意欲をそそられるテーマである。サービス事業者であるがゆえに、研究者ではなかなか手に入れない貴重なデータを自在に使った研究成果は迫力がある。

原氏には「東京五輪に向けた観光情報学と観光プランニングサービス」というタイトルで、2020年に向けて研究を行っている観光ビッグデータ、シェアリングサービス、災害情報の多言語提供について紹介いただいた。

観光情報 LOD やパーソナルデータ、ビッグデータが結びつき、東京オリンピックへ向けてさまざまな研究、サービス実装が盛んになっていくはずである。その先駆けとなる研究事例として、興味深い内容である。

最後に、本特集記事の編集にあたってご尽力いただいた執筆者、関係者の皆様に心より感謝申し上げたい。本特集が読者の皆様の研究を進めるうえでのヒントになることができれば幸いである。